



## ～ 土壌診断は畑の健康診断 ～

8月に母島の営農研修所とともに、土壌診断を実施しました。母島から43検体、父島から6検体の計49検体の土壌を分析しました。

結果の概要を下の表に示します。リン酸が少ない畑が多くみられました。これまでの基肥に追加して過リン酸石灰や重焼リンを施用することをお勧めします。また、父島の畑では苦土(自然由来)が多かったので酸性土壌のpHを矯正する場合は、苦土が含まれていない炭酸カルシウムを施用してください。

### 土壌診断結果の概要

項目	目安	平均	最低	最高
pH	5.5～7.0	6.1	4.6	7.8
EC (mS/cm)	0.1～0.5	0.4	0.04	1.6
リン酸 (mg/100g)	20～75	22	3.9	47
石灰 (mg/100g)	300～500	396	175	965
苦土 (mg/100g)	60～100	122	30	404
カリ (mg/100g)	50～90	119	53	581

毎作、同じ肥料を同じ量だけ施用すると作物の養分吸収特性や天候により、土壌の養分バランスが徐々に崩れていきます。作物が悲鳴をあげる前に、次作の土作りには以下のことに注意してください。

### 本来の土壌の特徴を把握する。

苦土が多く含まれる赤色土です。一般的に

苦土が多いと石灰やカリの吸収が抑えられます。

### 作物の最適生育環境を考慮する。

作物によって好む土壌環境が異なるので灌水量やpHを調整しましょう。

### 土壌診断結果を考慮する。

配合肥料だと不足している以外の養分も供給されるので単肥で補充するとよいです。



土壌分析の様子

農家のみなさんには分析機器の故障により結果報告が遅くなりましたことを深くお詫びいたします。また、来年度も土壌診断を実施します。実施時期や回数、診断項目などについてのご要望がありましたら、営農研修所または亜熱帯農業センターにご連絡ください。

私たちが健康診断をするように、畑の土の健康診断も定期的にするようにこころがけ、健全な作物を栽培しましょう。

< 宗 >

## 採集例の少ない蛾の幼虫による植物被害

今年は、小笠原ではこれまで採集例が少なかった蛾の発生とその植物被害が目立ちましたので、紹介します。

### ネジロフトクチバ ヤガ科



レイシ(ライチ)の新葉を食害します。幼虫の体長は5cmほどになります。中国、ベトナム、インド、オーストラリア、日本では北海道から九州、沖縄などに分布します。小笠原からの幼虫の採集は過去に一度だけあり、この時もレイシからの発見でした。レイシのほかムクロジやクスノハカエデを餌としています。成虫は小笠原からもまれに採集されています。

### キバラケンモン ヤガ科



カンヒザクラの葉を食害します。終齢幼虫の体長はおよそ5cmのいわゆる毛虫で、台湾、中国、インド、日本では北海道から九州、沖縄などに分布します。小笠原からは初めての採集となります。

### キロスズメ スズメガ科



ヤマノイモ科の植物を食害します。終齢幼虫は大きく、体長はおよそ10cmです。母島で成虫が採集されたことが一度ありますが、父島からは初記録となります。

### キョウチクトウスズメ スズメガ科



キョウチクトウやニチニチソウを食害します。終齢幼虫の体長は10cm前後です。小笠原では5年前にも発生しました。成虫はグリーンを基調とした迷彩模様をしています。

近年、新たな侵入害虫による農産物被害が多く見られるようになってきました。被害の拡大を防ぐためにも、見慣れない病害虫が発生しましたら、農業センターまでご一報ください。

<小野>

## 玉川ダムの環境影響調査行っています

### ダム浚渫工事完了

母島における農業用水不足を解消するため、母島の玉川ダムで平成18年度浚渫工事を実施しました。

この結果、ダム貯水量が約21,000 m<sup>3</sup>から約25,000 m<sup>3</sup>に拡大されました。

浚渫後、長雨のおかげ？もあって、現在満水となっています。



位置図 玉川ダム全景(H19.9.20撮影)

### 環境影響調査(事前調査)

浚渫工事によって影響を受けると考えられる、玉川ダム及びその周辺に生息する鳥類及び水生生物の調査を工事前にを行いました。

結果、絶滅危惧種であるハジマダクワガタやカササギ、固有種のカササギカマキリ及びカササギコブムシ、カササギヨシノボリの生息を確認しました。



: オガサワラノスリ

: オガサワラコブムシ

: オガサワラカワニナ

: オガサワラヨシノボリ

【平成18年度玉川ダム(母島)環境調査報告書抜粋】

### 環境影響調査(事後調査)

事前調査の結果により、浚渫工事にあたっては、環境への配慮を十分行ってきました。

今回の調査は、工事完了後の鳥類及び水生生物の生息状況を確認することです。

調査内容は次のとおりです。

#### 1. 鳥類調査

(1) 定点記録法による種類確認調査

2種類の方法で調査を行います。

一定の場所と時間帯における、鳥の種類と個数を確認する調査。

【定点センサス】

一定の時間帯における、範囲設定した区域を歩きながら、鳥の種類と個数を確認する調査。 【ラインセンサス】

(2) カササギの営巣地確認調査

定点観察により確認を行います。

#### 2. 水生生物調査

(1) 定性的な生息種確認調査

目視観察や死網、ふるい、叉手網、蟹籠、バイトラップ等を使用して生物の種類を確認します。

(2) 生息密度調査

固有種を対象として、河床や水深等、環境の異なる地点に方形枠を設置して、個数を確認します。

今後は・・・

調査は平成20年2月末まで行います。

今回の結果は、将来同様の工事を行うときに活用していきます。

< 産業係：兼子 >

## 小笠原の畜産振興について

来年度で牛舎の整備などが行われた小笠原振興事業が終了します。今回、小笠原の畜産振興の新たな展開に向けて、新しい技術の紹介と畜産指導所の取り組みについてお知らせします。

### 和牛放牧の技術開発

全国的に中山間地域では高齢化などによる耕作放棄地の拡大が問題となっています。そこで和牛の放牧を行うことにより、長年耕作されなかった農地を蘇らせる試みが各地で行われています。電気柵の性能が向上し信頼性が高まったことにより、これらの取り組みが盛んになりました。

この技術を導入するためには、小笠原の農地の牧養力を検証し、一頭当たりの放牧可能な面積を把握する必要があります。

小笠原での放牧技術が確立すれば、放牧場として未利用農地の活用や耕作放棄地への省力的かつ低コストでの開墾が期待できます。



小笠原における和牛の放牧風景

### 自給飼料収穫の省力化、高品質化

小笠原は購入飼料の価格が高く、内地と比較するとハンディを抱えています。また、自給飼料の生産を妨げる要因として、酷暑時でのサイロ詰めなど作業の過酷さがあります。過酷な収穫作業の

省力化のため各地で細断型ロールベラーによる収穫・調整が普及しはじめました。細断型ロールベラーは、飼料作物をハーベスターで収穫した後、ロール状にまとめる機械で、ラッピングマシーンでラップすることでそのままサイレージにすることができます。非常に省力的であり、サイレージの品質も良好です。通年のサイレージ給与が可能になり、購入飼料費の削減が可能です。導入コストが問題ですが、近年、小型化したベラーが開発されました。

今後、小笠原の実情に合わせた機種種の選定や飼料畑の整備などを考えていく必要があります。

### 羽毛鑑別鶏による養鶏の振興

現在畜産指導所では平成16年度に導入した羽毛種鶏を用いて羽毛鑑別鶏の作出試験を行っています。一方、地産地消の推進のため新鮮で「安心安全な鶏卵」を島民や観光客に供給していくことが求められています。そのために、畜産指導所ではこの羽毛鑑別鶏を利用して、健康なヒナを農家に供給することで優良な鶏卵の生産を支援していきたいと考えています。さらに内地からの鶏卵との差別化を図れるように試験を続けていきます。



羽毛鑑別鶏のヒナ 左が 右が

< 畜産指導所：舩屋 >